

浄土

1983-6

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雑誌）第三二五号
昭和五十八年五月二十五日印刷 昭和五十八年六月一日発行
第四十九卷 六月号



岡空仙



現在を大切に

我々日本人の寿命は大変延びているといわれている。「七十歳ぐらいまで生きられますよ」と、かつてある温泉地で一治療師からいわれた私も、三年前に八十歳を越えてしまった。最近、老人福祉、老人健康、老人病等、実に多くの老人問題が取り上げられ論議されている。これ等は私にとって無関心ではいられないものばかりだ。

私自身の記憶力は全く弱くなり、忘れっぽくなっている。ボケが増して恍惚の人になリかかっているのかもしれない。

老人は兎角昔のことを語ったり、自慢話をするようだ。ところが、私は元来、そういう話が嫌いである。過ぎたことを後になつてあれこれいうのが好きでない。ゲーテの格言集の中に出てくる、「人間は現在を貴び生かすことを知らないから、よりよい

未来にこがれたり過去に媚を送ったりする」という言葉は感銘が深い。

『スツタニバータ』の九四四番に、

「古いものを喜こんではならない。また、新しいものに魅惑されてはならない。滅びゆくものを悲しんではならない。牽引するもの（愛執）にとらわれではならない」

とある。

万物は流転していて常に同じではない。瞬時もとどまることなく変転をつづけている。我々は宇宙の大きな命の中で生かしていただいているものであるから、小さな自分のはからいのみ、かたくなにとらわれず、宇宙的大生命の理法に順応していくべ

きである。

生の裏面は死であり、死は絶対的のもの。生を受けて此の世に出てきたのは、永遠なる出生前の世界があり、多くのご縁があった故と思っている。生の終わりには死が来るのは当然のことで、死を逃れるみちはない。

私は死を恐れ、こだわり、見つめ続けて半世紀。普通でない、病的な思いにとらわれていると見られている。

生命は尊い。しかし、生から離れる時を持たねばならない。死後の世界を経験して生の世界へ戻った例はない。知ること不可能な死後の世界の有無はわからないが、出生前の世界を考える時、死後のみが虚無とは思えない。無責任な生き方をしないためにも死後の世界はあるかもしれないとしておいた方がよいと思う。人間の帰りに赴く世界の實在をつかむには、常に仏を念じながら自らの体験を重ね、うなづいていく以外にはありませんまい。

（吉田勇之助）

六月号



我れ仏道を成ずるに至らば、名声十方に超え、究竟して聞ゆるところなくんば、誓って正覚を成ぜし。

——『無量寿経』四誓偈

目次

法 話

黄色い道と白い道……………森 正義……(2)

人生の旅路……………長 田 善 弘……(6)

〈ずいそう〉 追憶……………遠 田 弘 俊……(11)

(一) (口) (法) (話)

他力の念仏と喩え話……………村 瀬 秀 雄……(16)

エッセイ 卒業……………木 下 隆 一……(22)

鳴かぬ鳥の声をきく……………松 崎 可 定 ……(18)

仏教行軍日記

六月、御霊会と施餓鬼……………鷲 見 定 信……(30)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

〈表紙裏・巻頭言〉 現在を大切に……………吉 田 勇 之 助

念仏ひじり三国志 (109) ——法然をめぐる人々…寺 内 大 吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

法 話

黄色い道と白い道



もり しょうぎ
森 正義

(藤井寺市善光寺住職)

大阪市の地下鉄長居駅に行く舗道に黄色い道がついて

います。その道には尖起物がついていまして歩いていると足の裏にその感触が伝わって来ます。

つまり盲人用の道なのであります。

杖でさぐってもそのジグザグに当ってよく判ります。

この道をたどってゆきますとエレベーターのついた長居駅に自然と到着することが出来るのであります。

目のご不自由な方々はこの黄色い道のおかげで楽々と

長居駅へ到着するのであります。

この道は、大阪市立身体障害者スポーツセンターにも続いておりまして、そこにはプールや各種の運動設備がととのっており、身体障害の方々が嬉々としてスポーツを楽しんでおられます。

近頃、街の舗道や、信号を渡る道にこうした黄色い道がつけられるようになった事は本当に有難い事でありま

健康な者は、この黄色い道を目の不自由な方が安心して通れるように障害物である自転車や單車や荷物などを置かないように、また置いてあったら除いたあげるよう注意したいものであります。

私達は目は開いていても、心の眼はまっくらであります。

元祖法然上人でさえ、

「智慧の眼盲しい行の足なえたるもがらなり」と、自らを反省しておられます。

智慧の眼がくもり、戒行を一戒をも保てない、おろかな私が救われる道があるでしょうか。

ここに善導大師の二河白道のたとえがあります。

お念仏の先徳向阿上人は、その著「西宗要」の中に実に美しい文章でお説き下さっていますので、その全文をかかげ味わせていただく事にいたします。

譬へば人ありて西に向ひて行く。先を見れば、南に火の河燃え、北に水の河流れたり中を渡りて、いささかなる白き道あり。

その二つの河のおおきさ底もなく、又涯りもなし。この白き道の広さは僅かに四五寸許りなり。あし踏み立て

ん程だにもあるか無きかの道なれば、たゞをしなべて河とのみ見えたり。つやつや渡り得べき心地もせず、いわんや浪はひまもなく立つ。道はいつとなくうづもれがちなり。いづくをか脚にもまかせん。いかでか渡らんともおもひよりける。渡らば定めて死ぬべしと、をくしはてていたれば、東の岸に人の声ありて、ただその道を渡りて行け。苦しくはあらじとすゝめ、西の岸よりは又たゞ来れ。我能く汝を護れば、道細くとも水火の河には墮すまじきぞと、喚ぶをとすとなり。これを聞きてさらばと思ひ立つちはあらふけれど、ひたすらくゝにやり、彼処に喚ぶるべかりをたのみにて、二つの河をかえり見ず渡るほどに、げにもかひがひしく護り玉ひければ、事なくて西の岸につきぬ。よろこびきはまりなし。

この譬論の意をいただきますと——、たった一人ぼっちで曠野を歩いてゆく旅人がありました。ふと気がつきますと自分の後から沢山の賊や恐しい悪獣や毒蛇が追いかけてくるではありませんか。旅人はびっくりして一目散に駆け出しました。すると旅人の行く手に大きな河が横たわっているのです。南にずーっときわまりなく続いている河は火の河で火焰もうもうとして河の上をおおっ

て燃えています。

北の方につづいてゐる水の河は、その底はかぎりなく深くその上おそろしい波が高く立ちさわいでおります。

この火の河のまん中に、ちょうど旅人の立つており、足もとから幅わずかに四、五寸ほどの白い道が、こちらの岸からはるか向うの岸までずーっと続いております。

しかし、この細い道は南の方は、焰によって焼きつくされそうですし、北からは恐しい高波がたたきつけているのです。

進むもならず、退くもならず、身体ここにきわまった旅人は、この二つの河を前にして、

「行くうか。戻ろうか。戻ったら群賊の為に殺されるか、猛獣毒蛇の餌食になる事は明かである。

そうだ。どうせ命が無いのなら、この白い道こそただ一つの救いだ。この道を渡ってゆけば或は命が助かるかも知れない。」

と、思いました。

これが往生を願う心であります。

善導大師は、

「すでにこの道あり。必ず渡るべし。」

と、おおせになつておられます。

旅人が、

「そうだ。この道を渡ろう。」

と決心した時であります。東の岸から、

「汝、心を一つにしてその道を渡ってゆきなさい。必ず救われるであらう。」

という声が聞えて来ました。

「だれだろうか。あの声は。」

と、思った時でした。

ふと、西の方から美しい声が聞えて来ました。

「汝、正念にしてその道をまっ直ぐ歩いて来なさい。必ず護つてあげるから迷わず一心に渡って来なさい。」

東の岸のお声はお釈迦様、西の岸のお声は大慈悲の阿

弥陀如来であります。旅人の決心はつきました。

「この道こそ、阿弥陀さまが私の為にご用意下さった

道なのだ。迷つてはならぬ。一心に、なむあみだぶつとおとなえしながら渡つてゆこう。なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。」

法然上人は、このところを、

「われは烏帽子もきぬ法然房なり。黒白をも知らぬ童

子の如く、是非をも智らぬ無智の者なり。ただ念仏往生を仰いで信ず。

釈迦は念仏して往生せよと勧め、弥陀は念仏せよ。来迎せん、と仰せられたり。この一事を信じて余事を知らず」

と、おおせになっていらっしやいます。この旅人とは一体誰の事でしようか。この私なのです。

悪獸、毒蛇、群賊というのは、人間の現実の生活そのものであり、私の眼の前に現われた水、火の二河というのは何でしようか。

火の河とは怒りの心。

水の河とは、むさぼりの心。怒りの心。であります。

仏教では貧瞋痴の三つの煩惱の為に人間生活が研壞されるのだ。と教えられています。毎日の日暮しの中で、

「こんな事をしているはならぬ。なんとかして貧、

瞋、痴の三毒の煩惱の道から逃れる道はないだろうか。」

と思った時に「願往生心」浄きみ国へ往生したい、という切なる願いが起ってまいるのであります。

智慧の眼が見えなくなり

一つの行も行う事が出来ない

愚かな私ではありますが、ただ一つの救いの御手が差しのべられていた。

この白い道を、ただ南無阿弥陀仏とおとなえて、少しのうたがいもなくまっしぐらに進んでゆくならば、目の不自由な方が黄色い道を、この道こそ私の為につけて下さった道なのである、と信じてうたがいなく進んで行くなれば、楽々と駅に到着するように、大慈悲の阿弥陀如来のまします浄きみ国極楽浄土へと迎え取っていただく事が出来るのであります。

合掌

長田芳一画／五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B5変型／定価三〇〇円

右近れい子画／福嶋智譽編

絵本 おじぞうさま

B5判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

多数刊行——

大 道 社

東京都千代田区飯田橋1-11-6

電話 03(262)5944 東京1-8247

人生の旅路

○ゲートボール

或る日の某新聞時事川柳にこんな一句が載っていた。

「ヤング寺まわり老人ゲートボール」。ずばり現代の

世相を風刺した名句であると思った。

私は度々高齢者学級への講話に招かれて行くが、恐らくゲートボールのコートで日焼けしたであろう老人の顔に接する。その中には元氣そのものの顔もあれば、ほとほと疲れたといった顔も見受けられる。そんな時思わずこの句を思い出す。そして話を始めるに当

長 おさ 田 だ 善 ぜん 弘 こう

(今市市法蔵寺住職)

って逐々この句が口を突いて出て了う。その反応はま
ちまちのようである。

往時は老人がよく寺参りにいそしんだものであつた。今はどんな小さな村落や町内にもゲートボールのコートが出来ており老人が曲った腰を伸して喜々として励んでいる姿を見掛ける。客寄せのために最近開店した市内の大型スーパー店の屋上にもコートの設備があるとのことである。私の近所の老婆は足が痛むといつて医者通いを続け、坐ることも出来ない状態であるが、ゲートボールだけでは精が出るようである。

「皆さん、健康のためにゲートボールに精を出されることは結構なことです。一頃より一段と若返り、生活に張りが見受けられますことをお喜び申し上げます。然しあの運動は前屈みの姿勢が多い様ですから時々折背筋を伸す様心掛けて下さい。」と言付加え、「さて皆さん今はこれに励んでおられますが、先々、これが出来なくなったら次には何に興ぜられますか、考えられたことがありますか。」と質す。一同ボカンとして私が何を言おうとしているのかといった顔付きになる。」

それから序々に本題に入ることにする。

○ヤング

私はよく上洛する。その都度出来るだけ時間を作つては京都市内前の社寺へ詣ることにしている。その都度見掛けるのは若者のグループである。勿論老人も多く見受けられるが最近頗る若者の数が増えて来た様である。それだからといって彼等が皆信心家からであるとは云い切れないが、たとえ観光が主たる目的であったにもせよ、仏前に合掌し、社前で拍手を打ち、おみくじやお守りを受けて仲間と語り合う姿はほほえましくも尊く感じられる。そんな若者にはきつとよい前途が待ち受けているであらうことを祈らずにはいられない。

○老えるとは

昨今老人という言葉は好ましくないと云うので社会教育関係者は務めてこれを避けて高齢者と呼ぶ。言葉

のニュアンスは違っているけれども実体は同じなのである。そこで一体「老」とは何かと数種類の辞書で調べて見たら、次の様な意味の解釈が多かった。

「老」とは、さびる、品がつく、なれる、練達する、長老の尊称、先人、年功経験にとむ、甲羅を経る。大体以上の様であった。だから「老える」ということは尊いことなのである。ところで老えるということとはやはり種々の現象や障害が生ずるものである。

かの仙崖和尚は、老えの現象として、次の様に示されている。

一、手はふるう、足はひよろつく、齒は抜ける、耳はきこえず、眼は遠くなる。

一、くどくなる、氣短かになる、思いつくこと皆古くなる。

一、ききたがる、死にたがる、淋しがる、でしゃばりたがる、世話焼きたがる。

岩井智海上人は、

「この子に嫁が来たらいつ死んでもいい、嫁とる、せめて孫一人、孫に嫁が来てから。これが本根であらう」と仰言っておられる。「生きるための断片」の中から

つくづく思う。全くその通りであらうと。私も遂に古稀の歳を重ねた。あまり自覚症状はない心算でも、よそ目にはこんなところもあるのではないかと自省する。

○今を生きる

私をも含めて今の高齢者は「今」を何う生きるかに心をいたすべきだと思ふこと切なるものがある。

「今」をいまと書く。いはいつて了った過去であり、まはまだ来ない未来であり、いまとは、いつて了った過去と、まだ来ない未来の接点を捉すという。確かに老人は多くの場合、行つて了った過去への郷愁が優先する。今こそ徒らにこのメランコリーに執われることなく、これからを何う生きるかに心向けなければならぬと思われる。

○若き日を今に活かす

幸にも私は寺に生れ、寺に育ち、宗門の大学に学ん

だのであるが、多くの廻り道や道草を喰ったりはしたものの今日あることを仕合せに思っている。

かつて大学で学んだ折、私には本当に有難い先輩がいて呉れた。僅か一年間の寮での生活であったが、私を弟の様に面倒見て下さった、今は亡き宮林大昭先輩（惜しくも支那事変で戦死。現大正大学宮林昭彦教授の岳父）の指導のもとに過せたことである。先輩はよく云われた。「一人前の僧侶になる為には幾つかの要素と条件があるが、その一つは先づ人前でお話が出来ることが大切である。それには無い袖は振れないとの喩えの通り、聞法、読書、思索、そしてそれらを自分のものにするのである。それが自信教人信に繋がるのである」と、これは私への大きな教訓であった。私は先輩が卒業されると直ちに下宿へ移ったのである。当時仏書を始め書籍のメッカは神田神保町であったのでよく行ったものだった。なけなしの財布を叩いて欲しい本も買ったりした。

一昨年从去年にかけて本堂新築のことがあり、本堂の裏棚にあった古い本を無整理のままひとに頼んで幾つものダンボールへ詰めて積み重ねておいたが、時

折思い出しては、あれこれと探って見ると、結構沢山の本が見付かった。私は読み終えた時点で終了の年月日と簡単な感想を記していたが、これらを見て懐かしいと同時に、こんな本も読んだのかと、手前味噌の自己満足をも覚えた。（内容は殆んど忘れてはいるが、今に役立つ多くのものもある。）

○徳川家康の信仰

エッセーをということで約した心安さから拙稚な駄文を綴ったが、お許し願いたい。

大河ドラマの「徳川家康」は熱心な念仏信者であった事は皆さんよくご承知の通りである。これも生母於大の方の感化によるものであるが、国内の戦乱を鎮圧する為に種々な策略を巡らしてはいたものの、厭離穢土欣求浄土の旗印は、大きな理想に基いたものであった筈である。さればこそ多くの武将が成し得なかった大業を成就させたのである。

或る時彼が前田利家にこう語っている。

「南無阿弥陀仏……。われ等の常住座臥の心掛けでこ

ざる。この唱名にはわれ等の思案が益々間違っていてもお許し下さるようにと願いと、許されるであらうという安心とが表裏してござる。弥陀のお目からご覧ぜられたら、人間は皆憐れな煩惱の子であらうゆえ。」(昭和三十八年版「徳川家康」第十六巻、二四六ページ)

かように法然上人の念仏のみ心を汲みとって念仏生活怠りなかつたのである。ここに彼の人となり伺い知ることが出来る。

○安住の地を求めて

旅は帰る家があるから楽しいのである。人生は旅である。帰る処を定めての旅は最も安全で楽しい旅である。帰る処をお浄土と定めての旅こそ受け難き人身を受けた私達の心掛けでなければならない。

浄土宗の教えの最も基本的な三本の柱を先づ建てて見よう。これを一紙小消息のご法語をお借りして私なりに考えさせて頂くと、

一、所求(しよく)。求むるところは浄土。

十方に浄土多けれど西方を願うは十惡五逆の衆生の生るる故なり。

一、所歸(しよく)。歸依するは阿彌陀仏。

諸仏の中に弥陀に歸し奉る三念五念に至るまで自ら來迎し給う故なり。

一、去行(きぎよう)。手続きは称名念仏。

諸行の中に念仏を用うるはかの仏の本願なる故なり。

この様に三本の柱を確立して、如來の光明に浴し、人生の行路を定めるべきであらう。

「無量壽經」に十二光仏を讃えているが、その中から手近かな三光仏を挙げると、

一、清淨光仏とその光に遇うものは、あくなき貪りの心を滅して、正しい心を。

一、歡喜光仏とその光に遇うものは、激しい瞋りの心を滅して、楽しい心を。

一、智慧光仏とその光に遇う者は、迷いに惑う心を滅して、明るい心を。

かく三垢消滅して善心生ずの心境を育てて安住の地へ往き生きたいものである。

二人、下に弟二人、両親は本家から僅かの田畑を分けられて分家した零細農家の小作人として生計を立てていたようである。こうした家に育った者にとって、明治の末期、大正の初期の社会の情勢から、物語りを作るには凡そ事欠かぬことであつたらう。

私達の年輩者としては、寺へ入るということがどれ程その家にとって名誉であつたことか。当時は「一人出家すれば九属天に生ず」という諺を信じていた時代であつたから、親達としては、出来得れば男の子の一人ぐらいは寺へ送りたいのが、いつわりのない本根であつたことだらう。

然しどんなに両親が好んだとしても、肝心の本人がその氣にならねば及ばぬことでありましよう。

私の村、現在は礪波市に編入されて、礪波市増山と言つて、戸数八十軒といつて、村には、浄土宗と、浄土真宗の二ヶ寺があり、昔戦国時代に、神保氏の居城のあつた要崖の地

として、村としては必ずしも豊かな土地柄ではなかつたことでしよう。山あり、谷あり、その間に段々畑と稲田が重なりあつて、夕焼雲の美しい処であつた。

或る日母は、「利や（幼名利治^{としはる}）、放生津の寺へ小僧さんに行かんか」と話しかけたのです。誰が私を寺へ送ることを持ちかけたのか、私そのものが何故に寺へ行かねばならんかは当時としては一切知る由もなかつた。小学校一年生も終りに近い正月頃のことであつた。思えば不思議の縁です。私が或る日、当時としては珍しいカレンダーの絵を見乍ら、その図柄が荒波を蹴立てて恐しい迫力のある竜が昇天する様相が画かれていました。母に向つて、「此の絵は何だ」と尋ねたんです。すると母の答えが、「その絵は竜が海から昇るところだよ」「竜は海にいるんかね」「そうだよ海というところは広い広い水があつて、そこ

に竜が棲んでいて、そのように天に昇るんだよ」と、まことに楽しそうに語ってくれるんです。その時夢のように海の様子が浮んで来て、是非海が見たいと思うようになった。それから母に向かって海が見たいと駄々をこねたようでした。すると母は得たり賢しとばかりに、「そんなに海が見たければ、放生津の寺へ行けば毎日海が見られるよ」と。これがそもそも出家する最初の動機だったと思うのです。昔の高僧方のように、いわゆる世の無常を感じ、道心の起こすことによって出家したといった美しい話は、些かも無かったようでした。

愈々寺入りが定ってからは、誰れ彼れに方向って語った少年の言葉に一種の楽しさのようなものが漂っていたとのこと、後年私に話してくれた近所の人が居たものでした。仏縁とは不思議なものです。こうして寺へ入った一人の少年が、その後初めての土地で而も山村の幼童が町の子供達に混って小学校へ通うこ

ととなった。

新湊町放生津といえは、現在は市となり、漁場の町が工業の町に変貌しつつあって、昔のおもかげが殆んど見られぬ程の繁昌の都会となっています。

当時の追憶を繰って見れば、「おしん」の物語りに現われる景色が、さながらにこの身の辿った道を語ってくれているようで、若しこれが実在の人であろうと、単に小説の中の架空の人であろうと、作者としての人物描写の巧みさは、流石に観る者の心を捉えずには置かぬと思う。

時に大正五年三月二十八日、父に連れ立って、故郷の増山を発って、新湊町の大楽寺へ向ったのであった。その途中、新湊町と増山との凡そ半ば程の地点に大門町があり、その町の旧家の商店に姉が奉公していたのであった。姉もまた小学校半ばで遠縁を辿って務めの身となっていた。その後私も毎年の墓参には必ず立ち寄ることにしていたものである。

その姉も既に七十七歳を迎え、昨年主人に亡くなられたが、立派な子供達に恵まれて、何と不足ない生活を楽しんでいる。

偕而少年利治は、五里の山坂道を父と共に歩いたのだから強行軍であつただろう。漸くにして寺に着いて、初めての面接ということであつた。この頃の寺には既に先輩の弟子達が二人いて、淋しいとは思わぬ情況であつたが、父は二泊して帰つて行つた。

寺では最速お経の習得から始められ、師僧のもと、法兄二人、この他に小僧を世話する尼僧達二人、年老いた爺やと、日頃の生活は賑やかなことであつた。

筵の上での生活から、畳の上への生活、ランプから電灯へ、眼を見張ることばかりの大転換、珍しづくめの生活として、海を見たいと憧れて来た少年が、その海の広さに驚き、見るもの聞くものが新しい人生への導火線となつた。

あの頃の寺への弟子入りは、世の中の変遷

と共に大きく変りつつあつた様に思われる。その後十年、十五年には、追々と寺へ入る子供が減少の一途を迎つて寺で生れた親子師弟関係が多くなり、大正から昭和となり、やがて恐しい大戦を迎えて、そして終戦となり、戦後となつて、何も彼も変化して行く中で、寺院の生活も決して昔ながらとは言えないことでありましよう。

家を出るに先き立つて、寺へ行つてからの作法等を一応聞かされ、第一方丈さんへの挨拶から始まり、朝夕の勤行、食時の作法、在家生活とは凡そ異つたことのいかに多いかを判らぬままに両親が教えるのであつたが、果してそのことがどれ程現実に行われているものかは知る由もなかった。

私の家は分家だつたが、母方の遠縁に同じ新湊町の曼陀羅寺の一代に住職されていた方があつて、村の親戚では何かと寺への出入りがあつたのでした。その影響が増山村に深く浸透して、私の出家にも連つたことは否めな

い事実であり、その為に寺への憧憬が当時の村にも強く及んでいたことであつた。

愈々寺の生活が始つた。その年の四月には新しい学校に転入学し、山の村の学校から町の学校へ、それに加えて、毎日お経を習うことであり、一ヶ月位いの後には法兄と共に檀家への忌日参り、それが独り立ちになると、一日三軒から五軒程度の割り当てによつて、それぞれの家に巡回する。学校への往復には校具と衣を同時に持参して、朝の「齋参り」から午後の速夜（忌日前夜）参りと、殆んど休日なしの状態であつた。

町の郊外、農家への日参りは何となく懐しく、田植えの頃や稲刈りの頃ともなれば、遙かな礪波の連山を眺めて故郷の家を想つたこともあつた。

然しその少年の身に降つて沸いた事件が起きたのである。それは父の死であつた。

私が寺へ入つて三年目、十一歳の四月であつた。その時父は四十四歳、まだまだ若く働き盛りであつたのに、胃の悪質な潰瘍で医師からの死の宣告を受けたのであつた。私はこの事を幾度も語り、書きもした。父の臨終こそ私の死生観に深い感動を与えているものはないと思つてゐる。

私達兄弟五人は今も尚健在だが、姉と弟二人は相手に死別して独り暮らしとなつたことは、老境とは申せ、残された淋しさは一入のことと思うわけである。

語りたいこと書きたいこと、幼くして家を出て、僧としての生活に入つた者の繰り言は一人の生涯の生き様とした、ドラマ「おしん」を観て、吾が姉の一生を想ひ、己れの過去を憶う時、果してこれからの世に生きる子等の姿にどんな生き様となつて映ることであろうかと、泌み泌みと感じたことであつた。



(一) (口) (法) (話)

他力の念仏と喩え話

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

仏教の教理には深遠な哲理が説かれているし、今でも難しい修行に励んでいる人がいることは事実である。普通な人が自分の手が届かない教えや行を何んとなく有難いものに感ずるのは人情である。こうしたことから法然上人が浄土宗をお開きになった時に、並大抵でないご苦心があつたに相違ない。上人は念仏といつても他力の念仏と自力の念仏とがあつて、他力の念仏を唱えている者は必ず往生できるが、自力の念仏によつてでは往生できないと明確に仰せられている。それなら他力の念仏はどのような教えであるのか、人々に納得させることは容易なことではなかつたであらうと思われる。上人は他力本願をしばしば大きな船に喩えて説いている。

「慈悲の阿弥陀仏はわれわれを深く憐れみ、念仏という煩惱を断ち切る利剣によつて生死の世界の絆を断ち、念仏往生の本願という大船を苦海の波間に浮べ、われわれを乗せて彼の岸に運び給うのである」

また上人はいかに重い罪業を持った凡夫であっても本願という船に乗って生死の海を渡れば、そのまま往生できるのを、他力の往生というのであるとも仰せられている。他力の本願という大船がわれわれを彼岸に渡し給う

のであるから、船に乗っている者が善人でも悪人でも、賢人でも愚人でも同じであって少しも問題にならない道理である。ただこの大船に乗れるか乗れないかは、本願を信じるか信じないかによって決まるのである。聖覚の唯信鈔に、こんな話がある。

「高い崖の下にいて困っている時に、上に力の強い人がいて綱をおろし、この綱に掴まれば崖の上に引き上げてやるといったとする。その時に下にいる者が上にいる人の力を疑ったり綱の丈夫さを危ぶんで、手を拱いたままで綱を取らなかったとすれば、決して崖の上に登れるわけがない。それよりは崖の上の人の言葉に従って手を差し延べ、綱を掴めばたちまち崖の上に登ることができ。このように仏が人々を救い給う力を疑い、本願力を頼みにしない人は悟りという高い崖に登ることができない。ただ仏を信ずるという手を差し延べて、仏の誓願という綱をしつかり掴まなくてはならない」

これと同じような喩え話を、証賢が帰命本願鈔の中で述べている。この話では阿弥陀仏を漁師に喩え、われわれ凡夫を深海にさまよう飢えた魚に喩えている。仏という漁師が本願という釣竿をもって、煩惱と穢れに満ちて

いる娑婆という海に垂れ給うている。深海に住む凡夫という飢えた魚は、目の前の釣針についている念仏という餌をみつめて吞み込んでしまう。すると魚がたちまち釣り上げられるように、凡夫は直ちに苦海からのがれることができる。この時の魚の動作は目の前の餌を吞み込むだけであって、魚が深海から離れられたのは漁師の力によってである。

この話の魚はどんな魚でもよいわけで、種類とか大きさ等の区別は問題にならない。ただ餌を吞み込むかどうかだけが違うわけである。上人は仰せられていたご法語で、念仏を唱えれば何んの助けもかりずに往生できると、次のように仰せられている。

「本願の念仏は、念仏を唱えただけで往生できる。その他の善根功德の助けをかりなくてもよい。助けというのは智慧の修行も助けであり、戒律を守るのも助けであり、悟りを求める心も助けであり、慈悲心を起すのも助けである。善人は善人のままで念仏を唱え、悪人は悪人のままで念仏を唱え、ただ生れつきの姿のままで念仏を唱える人を、念仏に助けをかりない人というのである」

鳴かぬ鳥の声をきく

まつざき じょう
松崎 可定
(長野県飯島町聖徳寺住職)

闇の夜に鳴かぬ鳥の声をきけば

生れぬさきの親ぞ恋しき

この様な古歌があります。白隠禪師には「片手の声」(双手の音声)という公案もありますので、禪師の作と思われるわれます。これは臨済禪に於ては、最も一般的に用いられる「父母未生以前の面目」という公案と同じ趣旨でありましょう。ですから、この歌を解するには、普通の論理や頭での理解でなく、真に体験的人格であることが要求されている筈です。それ故、禪の専門道場に於て、専心学道しても仲々透関できない大事な問題であるので

す。

今はこの歌を、全くの門外漢の私が、私なりの自由な立場からの理解を試みて見たいと思います。禪者からは叱られるかも知れませんが、この歌は、単に禪の密室中にだけ閉じこめておくには勿体ないものがある様に思われるからです。というのは、この歌は一般仏教の理解や教化活動にも大変役立つものがある故です。

このことは、曾て妹尾義郎先生に私解を呈したところ、それは新しい見方だと賛同を得たことがあります。

つまり「闇の夜の鳴かぬ鳥の声」というのは、仏教の因縁の理のことです。冥々の理といわれる様に、物は、自覚するしないに拘らず、何一つ因縁の理に外れたものではなく、今私があるのは、第一には父母の縁がなければなりません。両親には四人の親があり、その親は又八人ある筈で、この様に遡って十代二十代と考えて見ると、一人の私には何千万億という莫大な祖先が必ずあることになります。その永い連続の中で、何千万分の一である一人が欠けたならば今の自分は無い訳です。しかも、人間一人を育てるのは、実に容易な苦勞ではありません。いうならば、無限の先人の温い心と骨折りの結晶が自分であるのです。しかし、それら過去の人達の姿は今見えませんし、声も聞けません。実に、あたかも闇の鳴かぬ鳥です。

闇の中でも、白いものならば、眼の前へ持ってくれば幾らか見えるかも知れませんが、真黒な鳥です。たとえ眼には見えなくとも、鳴き声を聞けばこれは鳥であり、鳩や雀でないと解る筈です。ところが鳴かないのです。これが私たちの先人祖先です。それ故、うっかりすると、自分は誰の世話にもならないで、天から降ってきた

か、地から湧いて出たかの様な錯覚をしてしまいます。又、自分には犬や猫に生れなくて、人間に生れて来る自由や保証が何処かにあったかの様な、更には自分の才能や体力等を選んで生れてくる権利があったかの様な人間観を持ち易いのです。ところが、この様な人間観を育てているのが今の教育ではないでしょうか。

自分を支えている無限の好因縁、無量の恩恵、これを知ることが恩を知るということであって、古来わが国では、恩を知らない人間は、人間の形をした獣であると考えられています。この様な人間存在の自覚は、今日最も緊要であって、自分が他人に支えられていることを知ることにより、自分もまた、他の人のために尽さねばならないという心が起るのであって、「恩を知るは大悲の本なり」(大智度論)とされる所以であります。恩などいえば、それは封建道徳であるとして、まったく棄て去っているのが戦後思想であります。果してそれで良いのでしょうか。

名著といわれる「菊と刀」の著者ベネディクトは恩のことに触れていますが、それは「やくざ」の一宿一飯の恩義とか、義理人情といった風のものであって、恩義は

自分が背負いこんだ個人的負債の様に、必ずお返しをして、対人的に負目のない潔きよさを貴ぶものであるかの様に思われます。これは、仏教が天地にまで恩を思い、一般に開かれた倫理の根元になっているのとは、大変異なる様です。

仏教の説く恩は、儒教の説とも異り、与えるとか、与えられるといったものではありません。仏教では布施に於ても、三輪空といって、「自分が」「何を」「誰に」という様な意識がある時は、真の布施にはならないとされています。そこで仏教の大事なことは、恩は施すものでなく、唯受けとられるもの、頂くべきものとしている点です。施すものなくして、しかもこちらは有難いと受取る、これが恩の考え方であります。

例えば、日本人は「今日は天気でありがたい」という風に日常に言っていますが、実は天に好意があつて恵んでくれるのではなく、天候は地球表面の気温や、気圧等の関係に支配されているのであつて、天候の良し悪しは自然現象であり、いわば当り前のことです。親が子供を育てるのも、一面これ又当り前ではあるが、この当り前のことを、しかも有難いと感謝して受取る。この様な受

取り方が恩に成り立つのです。これが鳴かない鳥の声を聴くことであり、生れる前の親にも親愛の情を寄せることは、人間の好ましい生き方の根本であります。

機械を扱うには、凡そ起りそうな故障が必ず起きない様にと、万全の調整をしておくことが、機械の鳴かぬ声を聴くことでありましょう。自然を破壊すれば、土石流や、洪水が起ることは当然であつて、災害があつてからの対策でなく、予め備えて治山治水をして不時に備えることが、声なき自然の声を聴くことであります。そこには、人間の冷静な知性が必要です。親は子供の方からあはしてくれ、ころしてくれと要求される前に進んであれこれとしてくれます。これも鳴かない声を聴いている姿勢です。ここにあるものは温い心思いやりの誠心であります。

親の恩に報ゆることが孝道ですが、戦後は孝などといえ、それは封建的奴隷道徳だとして、民主主義に反するものと悪しざまにのみいわれて来ました。「孝行無用」という本が出ていますが、そこでは、孝行は無用だけでなく有害だとさえ書いています。親も子も人間としては平等であつても、親がなければ子はあり得ません。さす

れば親は子供にとっては平等ではなく、絶対差別的存在です。又、曉鳥敏さんの歌に「十億の人に十億の母あるも、わが母にまさる母ありなんや」というのがありますが、この様々な特殊な存在に対しては、又、子として特殊な接し方がなければなりません。これが孝道でありましょう。

戦後孝道を貶して悪くいう人が、孝を正しく理解してのものならば兎も角、多くは、孝でないものを誤って孝であるとして非難しています。親は楽をし、勝手なことをして、子供にのみ犠牲を要求しても、唯々忍従することが孝であるかの様に言っています。この様な、親が子供の人格を押潰してしまっている形は、断じて孝道ではなりません。中国やわが国には昔から孝子伝という本がありますから、それを見れば解りますが、孝というのは、大きな親の權威の下に、小さくなっているのではなく、却って子供が人格的には親より大きくなり、子供が親を温かく包み抱いた形であります。

一例を挙げれば、古代中国に於て孝子とされている人に関子賽（びんしけん）という人があります。彼の継母は、実子である弟の方は大変愛して、温い着物を着せて

いたのに、継子の彼には着せていなかった。そのことを知った彼の父は非常に怒って継母を追いつつとした。ところが、彼れは父を諫めて「自分は大きくなっているから寒さも我慢出来るが、万一母を追いついたら、幼い弟が寒い目にあう故、可愛想だから、止めて貰いたい」といって、遂にことなきを得たので、以後継母も非を悔い、実子以上に彼を愛したという。つまり親に盲従するのではなく、自分に冷い継母をも庇い、一家全員が幸福になる道を選んだところに孝子とされる理由があるので

す。
親に盲従するのではなく、親が間違っていれば、これを正し導くことが孝である訳で、沢庵禪師も、「一切道に叶うこれ孝なり」といっている通り、親に楽をさせることも大切ですが、子たる自分が正しく立派に生きるこそが何よりの孝であるとされています。

孝道を説く必要は、親のためであるよりは、寧ろ子供の健全育成のためであります。現時の青少年問題を考える時、鳴かぬ鳥の声をきく明察と、温い心による対応の要を思うものであります。

エッセイ

卒業



久し振りに娘のひろみから手紙が来たのは三月の半ばであった。留学する時に決めた週一回の交換書簡という約束は、この一、二年くずれ放しだが、それというのも、近頃は直通電話で事足りているからである。

「——いよいよというか、やっとというか、

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

卒業です。いま気懸りなのは卒業論文だけ。でも自信ありますから、ご心配なく。なお、卒業式は六月五日。今年から式服のキャップとガウンが十五年振りに復活するとか。学長の発言問題を巡って、いま学内では賛否両論渦巻き、お互いにキャンペーンを張って、ワ

イワイやっています。内心ではみんなガウンを着たいのです……」

これに対して、「私は、何事もアメリカ人、それも白人優先の大学であるから、日本並びに日本人に対して偏見を持った先生がいなくても限らない。最後の詰めを誤ると、積年の努力は水泡に帰してしまふ。式服問題然り。卒業論文然り。その辺のことに充分留意して対処されたし」と、折り返し返事を書き送った。

確かにこのたびの騒動は、学長の「黒人並びに少数民族の諸君も、伝統ある我が大学のキャップとガウンをつけて卒業出来ることを光榮に思う日が来るであろう」という侮辱的な発言に、学生たちがカチンときているだけで、それほど深刻な問題でもなさそうである。

——いよいよというか、やっとうというかとひろみは言っているが、卒業に至るまでの過程に、私はやれやれという思いを付け加えた

い心境である。高校の途中から私たちの手許を離れて以来、いつか七年の歳月が経っている。その間しばらく休学して日本へ帰って来ていたこともあったが……。我が娘ながら、よく頑張ったものだと思う。多少廻り道はしたものの、それなりの国際感覚は身につけたであろうし、何にも増して、知人友人の輪が広がったことが、ひろみの将来にどれほどプラスになるか、計り知れないものがある。

ふと思いたって、高校の卒業式のアルバムを開いてみた。懐かしい顔が並んでいる。添付したメモには、

一九七七年六月十六日、木曜日、快晴。
抜けるような碧空。

とある。

クリスマス・ハイスchoolの卒業式は午後六時から始った。サマータイムの六時、斜めに射し込む西日はかなり強烈であったが、空気が乾いているので、さほど暑さは感じなかった。式場は林間の広場で、ちょっとした

野外劇場の趣である。小高くなった方に雛段を設け、卒業生はその上に、女子を最前列にし、その後ろに二列男子生徒が並んだ。我々は観客席にあたる所に置かれた椅子に腰をおろして、壇上を見つめるのであった。

女子は思ひ思ひの純白のロングドレスで手に花束を持ち、男子はライトブルーのタキシード風の上下。襟元に一輪紅い花を挿して、一様に上気した顔を並べていた。

良い卒業式であった。ひろみがこのような卒業式に出席出来ようとは、一年前誰が想像し得たであろうか。すべてに感謝!! いま私に言えるのは、ただこの一言だけである。

(女子のドレスは、後にウェイングドレスに変身するそうだが、男子の服は? 素朴な疑問である。)

自ら愛車を駆り、四日という日時を費して、イエガー家はインディアナ州のシーモアから、ひろみの卒業式のために、わざわざカリフォルニア州サンディエゴ郊外のエル・カホンまで来てくれた。二年前、西も東も判らぬ日

本の女子高生を、同じ宗派に属する学校の子というだけで短期交換留学生として一夏世話した。ただそれだけの関係なのに……。夫妻は心からひろみの卒業を喜んで、実の娘のように抱擁するのであった。このホームステイでイエガー家に当らなければ、ひろみは留学しようという気を起こさなかつただろうし、例え留学したとしても、インディアナ州リッチモンドにある、アーラム・カレッジを進学先に選ぶことはなかつたであろうと、私は思っている。

デビー、キャシー、一級下のジェミー、それにひろみの四人は、短い間だったが、大の仲良しであった。この三人はひろみの庇護者であつたと言つてもいいだろう。その中の一人、デビーが卒業生を代表して冒頭の挨拶をした。いつもより早口だったが、無事大任を果たした。彼女のスピーチの出来栄が、そのあと式の流れをスムーズにしたと言えなくもなかつた。

夏時間昏れて卒業式終る

と、書かれてある。



先にもちよつと触れたが、イエガー家のことを忘れてはならない。イエガー家の住むシーモアという町は、インディアナポリスから車で南へ約一時間半下った所にある。昔は鉄道の要衝として栄えたようだが、いまは単線の鐵路が東西に走っているだけで、一日に何往復かの貨物便が百両以上の貨車を引いて、平原の彼方へ消えて行くという牧歌的な所である。

この準農村地帯の主婦の労働は大変である。家事はもとより、冬の間食糧品の備蓄から教会の奉仕活動等々……。しかし、ミセス・イエガーはそれを精力的にこなして行くので

ある。七六年の秋、初めてこの地を訪れた時、「これじゃあ『大草原の小さな家』のローラ・インガルスのお母さんとは大差ないじゃないか」と、私は思ったほどだった。ひろみはアーラム入学以後、冬と春の短い休暇をここで過している。片道二時間半の道のりを、車を飛ばしてミセスが送り迎えしてくれるのである。ひろみの表現によれば、拉致されるみたいに連れて行かれるらしい。

「娘一人、ガランとした寮に置いとけますかってね」

「有難いことではないか。アメリカに、ママがもう一人出来たもんだな」

と、私が言うと、娘は女房の背後姿を見やうて、声をひそめて言った。

「どちらのママも口やかましいけどね」



私がアーラムを訪れたのは、七八年の三月

の終りであった。繚乱の花のサンフランシスコから一転して、内陸部のこの地は早春にも程遠い気候であった。早朝戸外へ出ると、寒気にパチンと殴られたような痛みを頬に感じた。

早稲田大学の名誉教授で、交換教授で当地にお見えになった先生にお会いしたのは、この時、ウッド教授夫妻に招かれた晩餐の席であった。先生はその日の午後着かれたばかりで、かなりお疲れの様子にお見受けしたが、後にして思えば、すでにその時は病気が相当進行していたのかも知れなかった。お別れる時、

「先生もお一人では何かとご不便でしょう。何でもどしどし娘にお命じ下さい。お役に立てることもあろうかと存じます」

と申し上げると、

「その節はよろしくお願ひしますよ」

と、先生は私へとも娘へともつかずおっしゃって、ニツコリされた。

まさに文字通り、一期一会であった。その年の秋、病気が改って帰国されると、あつという間に先生は亡くなられた。お会いする暇もなかったのである。後日、奥様からお電話を頂いた。

「アーラムではお嬢様に大変お世話になりました。帰国する時も、試験の期間中にも拘らず、夜遅くまで荷造りを手伝って下さったり……。生前主人がよく申しておりました。いま時珍しい娘だ、日本の女子学生にはもう見られなくなった日本女性をアメリカで発見した思いがする。礼儀正しいし、敬語の使い方にも誤りがない。長年日本を離れているというのに、本当に珍しい……。余程家庭の躰が良かったのだろう……」

電話を受けた私は面映ゆかった。特別これといった躰をした覚えはないし、私の目から見れば不束な娘だが、そういう見方をして下さる方もあるのかと、先生の讃辞は素直に有難く頂戴した。

○

六月五日まで、もう一月もない。卒業式に出るか出ないか決めかねていたが、

「——さんに言われちゃった。『結婚式といふのは、人によっては二度三度と挙げる例があるけど、卒業式は、それもアメリカの大学の卒業式なんて、お嬢ちゃんの一生に一度のことなのよ。行っておあげなさいな』って」
大学時代の友人にそう言われた女房は、私に宣言するように言った。

「行きましょ！」

女房の友人の言は変な理屈だったが、妙に説得力を持っていた。

「よし、行くか」

六月の初めに日本を発って、私は五度目のアメリカ入りをする。今回が一番慌しい旅行になりそうであるが、この目でじっくりアメリカの大学の卒業式なるものを見て来たいと

思っている。

入学時の半数近くに減った卒業生の多くは医科大学へ進学するため、アメリカ全土へ散らばって行くという。ひろみにすれば、また一段と知人友人の輪が拡がるわけである。

「これがアーラム・ネットワークでございます」

いつかひろみがおどけてそう言ったことがあるが、ネットワークの編成は娘と女房に任せて、私は専らカメラマン的視野に立って、諸々の観察をするつもりでいる。(五月六日)

○

追伸、私は便宜上、卒業式と言っていますが、Commencement——それは新たな旅立ちを意味しています。六月五日は私の出発の日。清々しい思いで、通行手形としての卒業証書を受け取りたく思っています。(五月九日着)

浄土句集

一田牛畝選

福岡 上滝津弥音
臥す程にあらねど出渡る春の風邪

評 さ程でもないが、風邪は万病のもとであるから寝る程でもないが用心肝用。

法主句碑除幕若葉の善導寺
福岡 荒牧 還愚

下足札木目古りたる彼岸寺
東京 細田 初枝

春雷もみんなで居れば恐くなく
福岡 原 敬二郎

評 三月二十九日大本山善導寺の開山忌に

評 寺も古く、長く使われている下足札ら

評 思いがけぬ時に春雷はあるのである。

法主となった牛畝の「肅々と花の参道法主以下」の句碑が、『冬野』発行所より建立されて除幕された。百五十人の俳人と吉水講員七百人にて、秀峰先生の指揮で此の句が詠唱され、大樟は若葉に萌えて寿ぐ如くであった。

しい。彼岸婆が曲った腰をして皺の手で下足札を貰って本堂に詣っている姿は手を合せたくなる。
御法主となられて初の年賀かな
三重 森 静枝

初花に勅使門開く開山忌
福岡 林 澄山

山口 上野 明達
ガランビの灯台春の濤高し

評 拙僧が大本山善導寺の法主となり三月には大僧正に叙任された。その私より、初の年賀状を貰ったと喜こばれることは身に余る光栄である。

評 大本山善導寺の開山忌は、三月末であるから、桜が咲き初めて参詣者もよこばれる。開山上人の御興をかついでお練りがあって稚児で賑やかである。花の枝をつきあげて御興を通すのである。そし

評 台湾の旅にての作らしい。静かな台湾であるが、春の濤は高く完全な平和でもないらしい。

評 台湾の旅にての作らしい。静かな台湾であるが、春の濤は高く完全な平和でもないらしい。

て法要中は勅使門も開けられて、法主以下
の衆僧はその門より行列。

福岡 向江桔梗女
花の句碑除幕は孫の新発意

福岡 山崎 鬼川
父母の墓こぶさた久し彼岸入り

群馬 島津 か寿

福岡 宮田 良子

福岡 稲永美恵子
目さむれば外の国山は霞かな

芽木の中お顔やさしき地藏尊

御法主の句碑開眼や花の寺

目さむれば外の国山は霞かな

本山の大竹林にきく初音

福岡 服部 光代

福岡 釈河野ねはん
彼岸会座脇座三人小沙弥かな

福岡 田代 葦女
退職の夫啓蟄を耕せる

忘れ事したかのように戻り寒

山梨 青山富貴江

福岡 権藤みきを
麗らかや法主の句碑の今此処に

福岡 世利 展雄
巨楠に抱かれてぬくし法主句碑

半分を土に残して路の臺

長野 友潤旋風子

懐手して取り出す革財布

福岡 前田 秀峰

暖かや慈眼愛語の大僧正

佐賀 下尾 晴子

石仏の柔かき瞳や若芽燃ゆ

三重 山田 歌甫

一本の桜も見頃開山忌

大分 丹羽 難中

笈おろす雪香殿や冬安居

福岡 行正一如子

蒲公英のかたまり咲ける墓苑かな

埼玉 佐藤 泰子

御詠歌の鉦打ち揃ふ彼岸寺

福岡 行正 明弘

下蒔の土手になにやら摘める人

神奈川 森 初音

御浄土もこの世も葉に置炬燵

福岡 荒牧 亀齡

青空が見えて樹水の山まぶし

福岡 安藤平二郎

嫁の里螢よろこび孫泊る

一田 牛畝

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

(仏)
(教)
(行)
(事)
(一)
(年)

六月、御霊会と施餓鬼

鷲^{わし}
見^み
定^{じょう}
信^{しん}

〈御霊会〉

六月にはいると御霊会が各地で行われる。代表的なものは八坂神社の祇園会である。貞観十一年(八六九)に疫病が流行して、これを鎮めるためにはじめられたのである。御霊会の特色は、「たたる霊」をまつところにある。霊のたたりは、人間社会にさまざまな障害をあたえる。

夏は疫病の流行や雷の被害が多くなる季節である。農民にとっては虫の害や天候の異変は収獲に直接影響を及ぼし、生活をおびやかすものであるし、都市の生活者にとって疫病や落雷は防ぎようのない災いであった。生活の場が都市であれ農村であっても夏はきわめて気むずかしい季節であったに違いない。過度の災害は怨霊のたたりによるものとうけとられたのである。これに対して人々は「まつり」を行った。貞観五年(八六三)朝廷は神泉

苑の四門を開いて御霊会を実施した。直接のきっかけはこの年の春の「咳逆」の大流行であった。すでに民間においては相つゞ疫病、災難を御霊のたたりとしてまつりを行っていた。朝廷はそれを取りいれざるをえなかったのである。「……近代以来、疫病繁りに発り、死亡するもの甚だ多し、天下以為、此の災は御霊の生す所なり……」（三代実録）として崇道天皇以下六霊をまつたのである。これが公的な御霊会の最初である。この六霊はいづれも中央政界の政争の犠牲者であったことは興味深い。堀一郎にいわせれば民衆のもつ潜在的な、抑圧された権力の横暴さに対する攻撃性のはけ口でもあったのである。ともあれ異常な天候や流行病は怨霊のたたりであると考えられた。そして御霊は中央政界にかかわる有力者でうらみをのこした死者霊であるとされた。しかし時代がさがるにつれ御霊の意味もかわってきた。高取正男は一般の用例に従えば天災や疫病、戦争などのため悲業の最期をとげ、この世に怨みを残して死んだものの靈魂のほか、後世の例では鎌倉権五郎のような並はずれて勇猛な武士とか、佐倉宗五郎のように農民のために一身を犠牲にし、世のため進んで人柱になったような、常人と

はちがう特別な死に方をした人たちの靈魂を含んでいと述べている。それでは御霊はなぜたたらなければならぬのであろうか。少くも何故たたらと考えられたのであろうか。ここには日本人の靈魂に対する考え方がみられる。悲業の死をとげたものやまつり手のない死者の靈は、現世にも来世にも所属できない不安定な存在となる。

それゆえ危険なタタル存在へとなるのである。しかし丁重にまつれば、「和霊」として人間に恩寵をもたらす神に転ずるのである。たたる神の発現は御霊会にはじまるのではない。古くからの伝説であったといつてよいだろう。堀一郎は、氏神型と人神型の二つの信仰形態が組みあわさったものが日本人の信仰の基本的構造であるとみなした。そして最も典型的な人神型の信仰をアラヒトガミと称されるものにもとめたのである。御霊もアラヒトガミであった。言葉をかえれば、祖霊信仰と怨霊信仰との二種の信仰の重なり合いが日本人の信仰である。

そして怨霊信仰は御霊会のみ典型的にあらわれているのではなく、純粹な仏教行事である施餓鬼会もこの流れのなかにみることができらるであらう。

〈施餓鬼会〉

浄土宗大辞典によれば施餓鬼とは如来の大悲によって修道の障害をする餓鬼に飲食を施す法会とある。この法会が阿難尊者の説話に由来していることはすでに周知のことであるが、かいつまんであら筋をひいてみよう。ある夜半阿難のもとに焰口餓鬼があらわれて三日のうちに命がつきて餓鬼道に生れかわることを告げる。しかしあらゆる餓鬼と多くの婆羅門仙に飲食を供養し、さらに自分（焰口餓鬼）のために三宝を供養すれば寿命をのばすことができ、また自分も天上に生れかわることができる。と教えたのである。阿難尊者は師である釈尊に相談し、その教導のもとに施餓鬼を修して命を永らえたのである。ここに施餓鬼によって餓鬼は天上に生れ、施主は福德寿命をえるという二重の効果がとかれてゐる。しかし主体は餓鬼の昇天のようである。餓鬼とはなんであるか。

仏教語大辞典には、鬼は死者のたましいであり、古代インドでは粗霊のことを指していた。さらにそれは子孫

の供え物を期待していると考えられた。この觀念が仏教にとりいれられ、飢えて食物を待つ死者と考えられた、とみえてゐる。つまり（飢えた）祖霊が餓鬼なのである。

この「救拔焰口餓鬼陀羅尼經」が空海によって日本に伝えられたのである。日本伝来当初は密教系で行われていたが、鎌倉時代末から禅宗や他の宗派でもこれを修するようになったといわれている。鎌倉時代の「阿婆縛抄」には除病延命の行法として教えているが鎌倉末期には死者追善の法会として受容されるようになった。つまり飢えた祖霊は不慮の死や悲業の死者でみたされない霊と重ねて受容されたと考えることができるであろう。とくに江戸時代には天災などに際して亡魂得脱のための施餓鬼が行われてきたのはこの理由による。天明八年十二月には「……寺院に命じ給ひ、浅間山焼、奥州飢餓疫癘、関東出水、京都大火、焼死溺死等、此禍ニ罹りしものの為ニ施餓鬼を修せしめらる」（武江年表）とあり、また明暦の大火では幾多の死者のために回向院が建てられ、七月七日に大施餓鬼会が修せられた。施餓鬼が悲業の最期をとげた死者に対して最も有効な鎮めの方法と考えられていたことがわかる。死者霊には少くも悲業の死かどうか

による二種類がある。換言すれば普通の死か異常の死かの違いである。普通の死であつても死者の魂は不安定なものである。新亡は多くの儀礼の手つづきによって、安定した祖霊になるまで清めていかなければならない。それにしても祖霊までには民俗的思考では普通三十三年間かかるのである。平常のうちに死んだとしても危険な存在である死者なのに、非業の死をとげたら、その危険はより大きなものと考えられても不思議はない。

思いを現世に残しているに違いないからである。こうした死のあり方による違いとともにまつり手のある霊かどうかでもわかることができる。子孫などのまつり手がある場合は一時的には危険を秘めた死者も没後の供養によつて祖霊となれる。しかしまつり手のない場合は清められることがない。したがつていつまでも危険なアラボトケのままではいつづけなければならぬ。つまりたたりの可能性を秘めた霊は新亡であり、悲業の死者であり、まつり手のない死者であるといえよう。施餓鬼は本来随時に行われる法会であるが盆と習合することによつて一層その意味が強まったことも事実である。盆に迎える霊はそれぞれの家の祖霊、新精霊だけでなく外精霊といわ

れる一切の霊にまでおよんでいる。寺院の施餓鬼壇に相当する精霊棚に位牌をまつり、その前に飲食を設ける。それだけではなく精霊棚の下にも飲食を設けておくことや、家々の門口に土壇をつくり飲食もしくはそれにかわるものをあげておく風は各地にみることができ。これはいづれもまつり手のない霊のための施食とみてよいであらう。施餓鬼も盆も祖霊の他に外精霊にも供養することによつて、たたりをおさえてきたという点できわめて共通した行事であつた。

〈送る霊〉

御霊とよび餓鬼とよばれてもその本性はタタリを秘めた死者霊にちがいはなかった。とりあつかいをまちがうとたちまち靈威を発現する存在である。気をつかったことであらう。

盆にキユウリとナスで馬と牛をつくることはかなりの広がりをもっている。祖霊や新精霊が馬にのつて早く帰ってくることを、帰るときには午にのつてゆっくりと別れを惜しんで去るように、との願いをあらわしたものと

われている。しかしこの反対の説明をするとところもある。家に來るときは午にのってゆつくりと、帰るときには馬にのって早く去ってくれというものである。ここには靈に対するとりあつかいのむずかしさがみえるようである。

どちらの説明が正しいかどうかではなく、祖靈に対して愛惜と畏怖の相反する感情の併存をものがたっているのである。諸靈をまつり無事に送りだすことは最も重要なことだったに違いない。儀礼のプロセスは迎え—祀り—送るという分節からなるといふ考え方があつた。御靈も餓鬼も祀り送るといふ事に重点をおいてみることにできないだろうか。少くも御靈会である祇園祭や津島祭りが川や池に渡御する神輿洗いがハイライトであることに送りの意味がみえてゐる。また施餓鬼によって鎮められた靈も灯籠流しや、送り火によって送られるのである。しかしより積極的にみれば民間に行われる虫送りの行事に基本的な形がみられる。川や村境いに作物を荒す虫を送りだす呪術的儀礼である。各地に伝わる「虫送り念仏」もこの役割を担っているのである。御靈が害虫とされる例にはサネモリの行事があるし、施餓鬼の小旗が田

にたてられて虫害を防いでいる習俗もかつては多くみることができた。農村においては虫送り、都市においては厄神の鎮送は夏の行事であつたといえる。たたる靈は時代によってバラエティがあるにしても、日本人の信仰の基層部分をなしていたのである。御靈会も施餓鬼会もこうした怨靈信仰の流れのなかで、一方は民俗行事として一方仏教行事として対応してたのである。

◇“浄土句集” 欄投稿要項

一 ハガキ一葉に四、五句づつお書き下さい
投稿先——

〒812 福岡市博多区中興町10—14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1—11—6

法然上人讃仰会

前進座『法然』劇公演予定日程

◎巡演スケジュール

月日	公演地	会場名
6/2	熊本	熊本市民会館
" 4	鹿児島	鹿児島県文化センター
" 6	福岡	福岡市民会館
" 8	高松	高松市立市民会館
" 9	松山	松山市民会館
" 11	津山	津山文化センター
" 13	倉吉	倉吉福祉会館
" 14	大田	大田市民会館
" 15	出雲	出雲市民会館
" 17	敦賀	敦賀市民文化センター
" 18	福井	福井市文化会館
" 19	金沢	石川厚生年金会館
" 21	富山	富山県民会館
" 27	新潟	新潟県民会館
" 28	長岡	長岡市立劇場
" 30	長野	長野県民文化会館
7/1	上田	上田市民会館
" 2	同右	同右
" 3	高崎	群馬音楽センター
" 4	同右	同右
" 5	桐生	桐生市産業文化会館
" 7	松本	松本市民会館
" 8	諏訪	諏訪市文化センター

念佛ひじり三國志

(百九) 最終回

——法然をめぐる人々——



寺内大吉

挿絵 松濤達文画



愛発——あちら、と読む。

海津の町からこの愛発の旧関所跡をすぎると、そこはもう越前だ。ただし約七里の峠道が延々と敦賀の港町までつらなる。

愛発の関所は奈良朝までで平安京へ移ると廃止された

ようである。洛北の大原から近江へ抜ける伊香丘陵の登り口、竜華に関所が設けられた。

だが文治年間、源義経追捕のために愛発の関所は緊急に復活している。「愛発ノ山ニ関屋ヲコシラエ、夜三百人、昼三百人ノ関守ヲ据エテ、関屋ノ前ニ乱杭ヲ打ちテ、色モ白ク、向ウ齒ノ反リタルナドシタル者ヲバ、道ヲバスグニヤラズ、判官殿トテ摘ラメオキテ糾問シテゾヒシメキケル」と「義経記」は書く。

この建永二年三月、臨時の愛発関所は再び閉ざされていたであろう。難路嶮行の山路だけで充分だったのである。

この峠路が「七里半越え」であった。

明遍は海津の寺で一日半を休養した。到着した翌日がひどい吹き降りだったからである。いや、一昨日も洛北竜華の関所をすぎて伊香の丘陵を越えて湖畔へおりてきたら雨になっていた。行程ははかどらず、堅田で一泊。そのあとも半日しか歩けなかったのである。

ようやく晴れ間が出た。安居院にいたという年老いた祈禱僧は、案内に寺男を付けてくれた。未だ少年の面ざしがぬけきれない若者だった。

「今朝早く出立した者がいます。罪人ですがね」と愛発の山坂を登りはじめると若者は言った。

「罪人とは？」

「僧らしい人です。京から役人がひとりついてきています」

「越の国へゆくのかな」

「流されるのでしょうか。僧都さまと同じように昨夜は日吉神社の社殿で夜を明かしたそうです」

その流人も雨で降りこめられて、昨日は旅程を中止したのである。当時の流人護送は関所役人の任務だった。関所間をリレー式に分担し、流刑地まで送り届けるという仕組みであった。

流人の僧——それは専修念仏者であろうか、と明遍の胸をときめいた。今は一人でも多く受難者に接触し、道心の実体を確認しておきたいのが明遍の望みだった。

宗教という果実の奥底の味を噛みしめるには、悲劇の実体験こそが最大の經典となるであろう。

峠の茨道には、なお残雪があった。しかし昨夜海津で降った雨脚はここに至るまで及んでいたらしく狭い山路はぬかるんで、難儀をきわめた。

「重かるう」

明遍は前をゆく若者の背中へ声をかけた。筵でおおうた「ひかり仏」を背おっているのである。

「いま少しゆくと、小豆を食わせてくれる家があります」

若者はそれを楽しみにしているらしく、荷の重さもこたえないようである。

峠の茶屋、と言いたところだが、そんな風情は微塵

〈合 掌〉



もない。ごく普通の山家で、建物の前に草を刈った平地が少々ひらけ、腰掛けになりそうな石が転ろがっている。

すでに先客がいて、木の椀から煮こんだ小豆を啜っていた。二人づれだ。

蓬髪、麻の単衣に形ばかりの黒い袈裟を掛けている。

「善信房……とか申されたな」

明遍の声に親鸞はふりむくと、驚きの眸をひらいた。

「明遍僧都。どうして此処へ」

お互いに一面識だけである。今年の正月、安居院で出会っている。明遍はその席でこの念仏ひじりを煽動した記憶がある。

烏帽子姿の関所役人が、じろり視線を流してきた。

「この者は罪人で……」

あとの言葉を明遍は強くさえぎった。

「わかっておる。わしは高野の僧都、明遍である。この者と言葉をかわすに何の不都合があろう」

たしかに「僧都」という制法における僧位は威力があった。関所役人も官僚のはしくれである。僧都が官僚の世界で高等官ぐらゐに該当することは心得ていた。

そのまま黙りこんでしまった。

「旅は辛からう」

「足を痛めました。この人にも迷惑をかけています」
親鸞は腕で役人をさした。

わらじの爪先に血がにじんでいた。

現在、ここ愛発の山路に石碑がのこっている。親鸞作と称せられる歌が刻まれる。

越路なるあらしの山にゆきわかれ

足も血潮に染むるばかりぞ

「先日、鳥羽の先までお上人を見送ってきた」

「師のお上人を、ですか」

一瞬みはった親鸞の臉にすぐ小皺が波立ち、はらはらと涙がこぼれ落ちた。

法然の動静をあれこれと問いただしてくる。すこぶる元気であること、とりわけその精神は旺盛である点を強調したとき、親鸞は何度もうなずいた。

「当然です。師のお上人なら、それが日常のお姿です……ああ、それにしてもお変りないお上人。やはり間違つ

ていなかった。私が地獄の底までお供申上げると誓ったことに、間違いはなかった」

「善信房、法然どのは地獄へなぞ堕ちてはいかない」

明遍の言葉に親鸞は、きつとなって顔をおこした。涙で濡れていた眸に、鋭い光りが差しこんでいた。

「そうですとも。師のお上人は絶対に地獄へなぞ往きませぬ。だからこの私も大丈夫です。しかし明遍僧都、あなたはわかりませんよ」

返す刀で斬りつけてきた感じであった。

「うむ……」

明遍は、このひじりがただ者ではないことを認識し直すにはおれない。

「あなたは、私や善信房西意を諍論へおもむかせた」

「そのとおりだ」

「どんなつもりで、あの手はずを調えられたのですか」

「それは大相国や卿典侍に頼んで……」

「手はずの内容を訊いているのではございません。おつもりです。あなたのお心をうかがいたい」

「そうだのう」

「正直にお答えなさい」

裁かれているのは、どうやら明遍であった。

二一

小豆茶屋での会話は続く。

明遍は息苦しく答えねばならない。

「心づもりをありていに打ち明ければ、ある試みがあった」

「そうでしょう。諍論を他者にさせておいて、そこからご自分が何かを拾おうとする試み……」

親鸞は悲しげな眼で、明遍を見つめる。

「わしは東大寺の東南院から高野の蓮華谷へ通世した。ひじりとなった。しかし、わしの通世にはいつもこの試みが付きまとった。おのれ自身は路傍に立ちすくんで、苦しげに道往く人間を傍観してやろうという狡さだ」

「それは、お父上、信西入道どのの血ではございませんか」

「いや、父は父なりに泥まみれになって道を歩いた。兄の遊蓮房円照も同じように歩きとおして若死にした。血筋ではない。わしだけの性格（さが）だ」

「明遍どのの学ではありませぬか。この国における仏道も学が深まると、そういうお人を造り出すようになったのです。それはともかく、試みられたこの善信房は、いちだんと深い信心を身に付けることが出来ました」

「評論の果て、私はそんなものとは全く無縁な往生の要を知り得たのです。念仏とは甲斐なき人のためである事実を、改めて得心できたのです」

親鸞はこのあたりの心境を、後年になって弟子の唯円に語った「歎異抄」で余すところなく陳述しきつていく。

——専修念仏のひとと聖道門のひと、法論をくはだてて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりというほどに、法敵もいできたり謗法もおこる。みづからが法を破謗するにあらずや。念仏はかひなきひとのためなり。その宗あさしいやしというとも、さらにあらそはずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通のもの、信すればたすかるよし、うけたまはりて信じ候へば、さらに上根のひとのためにはいやしくと

も、われらがためには最上の法にてまします。

（中略）かつは評論のところにはもろもろの煩惱おこる。智者遠離すべきよしの証文候ふにこそ、故聖人（法然）のおほせには、この法を信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと、仏ときおかせ給ひたることなれば、われらはすでに信じてたてまつる

この文章にある「評論のところにはもろもろの煩惱おこる。智者遠離すべきよしの証文候ふにこそ、故聖人（法然）法然のおほせには……」云々は七箇条制誡のいましめである。親鸞はその点を承知しながらも建永の法難時に評論へ走った。だからここに至っての反省は、いや諄乎たる信心はいよいよ確固不拔なものとなったにちがいない。

評論に熱中するためには、それなりの学がなければならぬ。学のない一文不智の愚鈍者は、下手に評論の場にさらされたら言いまくられて迷いを深めるだけではないか。その一文不智の愚鈍者でも救われる、と阿弥陀仏は悲願をお立てになった。その悲願にこたえるために

は、称名念仏一本の信心以外にあり得ないではないか、と親鸞は主唱する。

「明遍どの。あれは何ですか。何を背おわせてきたのですか」

親鸞はさっきから気になっていたらしい寺男の荷物を指さした。寺男は小豆を食するべく、それをうやうやしく別の石の上に横たえてあったのである。

「内持仏だ。これから海へ捨てにゆく」

「仏像を捨てるのですか」

「法然ご房のお言葉を聞いて、その気になった」

「その内持仏は？」

「わし自身の手で刻んだものだ」

「だからお捨てになる？」

「わしの嫌な匂いがしみこんでおる。自力聖道門のいやらしさだな」

親鸞は声は洩らさなかったが、笑った。

「そんなことにまで自力ですか。聖道門ですか」

「間違っているかな」

「明遍どのはお上人の言葉を、ひがんでお聞きとりになったのではありませぬか」

「ひがんで聞いたとは……」

「仏像を刻んで拝するのも自力行なら、自らの手で毀却したり海へ捨てるのも自力行ではありませぬか」

「……」

「高名な明遍僧都が、手ずから内持仏を刻まれたことも評判になります。それを越の海へ捨てられたことも言いはやされるでしょう」

「ではどうしたらいいのか」

「そのままに放置しておくことです。元どおりに内持仏としておかざりになっておけばよろしいではありませんぬか」

「それが、わしにはたまらない」

「きちんと整備をつけずにはおれない」

「そのとおりだ」

「やっぱり明遍僧都は、間違はなく地獄へ堕ちますね」

笑いながら親鸞は突き放した。

「うむ……」

親鸞はそれきり何も言わず、関所役人の方をかえりみて立ち上がった。流刑の旅を続けようというのである。力強い足どりで歩きだした親鸞のあとを明遍はよろけ

ながら追ってゆく。どちらが流人で、自由人であるか判別が付きがたい。心の旅路では、明らかに明遍の方が「囚われた人」であった。

三

愛発を越えると、山路は次の深坂峠へかけて尾根が沈下する。いわゆる深い坂状をなして下り勾配になる。

このすぐ下まで人工運河の空堀ができていた。これは平重盛が琵琶湖と敦賀港を水路でつなぐとして塩津から掘りはじめたものだ。しかし深坂の下まできて巨岩にはばまれ、工事を中絶しなければならなかった。

そんな空堀を眼下に明遍たちは会話を保ちながら通過してゆく。

「わしが地獄へ堕ちた姿はどんなさまであるかな」

明遍はやや戯語めいて訊いた。

「明遍僧都の地獄ですか」

「どんな苦しみかたをするのかな」

「苦しめないでしょう」

「地獄にあっても苦しめないのか」

「現世にいるのと同じですよ」

「現世と同じとは？」

「あなたは針の筵にも坐らない。血の池にもはいらない。地獄にあるわずかな安らぎの場所に腰をおろして、苦しんでいる妄者どもを眺めているでしょうな」

「そんなことを閻魔大王が許すだろうか」

「許してもらうように僧都は懸命に努力をする。うまいことを言って閻魔大王を言いくるめてしまおう」

親鸞も戯語的にしゃべってはいるが、内容は辛辣だった。明遍の全人格をゆさぶろうとする。傍観者のであって、人生へまともにぶつかってゆこうとはしない態度を皮肉っているのだ。

「善信房、そなたは地獄へは堕ちないのか」

「堕ちませぬ」

「なぜだ。なぜ、そのように確信できるのか、阿弥陀仏の大慈大悲か」

「もちろんです」

「その証（あ）かしは？」

「証かしとおっしゃると」

「なぜ阿弥陀仏がおぬしを絶対に浄土へ導き給うと信じ

られるのか。法然ご房ですら、こうおっしゃっていたぞ」

「師のお上人が……何とおっしゃっていましたか」

親鸞の眼つきが俄かにけわしくなった。

「どんなに念仏をかさねても、現実には蓮華の台へ登って
みなければわからないとな」

「往生を疑われたのですか」

「だから初一念を取り戻し、念仏をやりあらためて唱え
なおすのだと」

「ああ、そういうおっしゃりかたでしたか」

「あの法然ご房ですら、安心しきっておられるわけでは
ない。決定往生は得られていない」

親鸞は安堵したような表情を回復した。

「明遍僧都、それは違います」

「どう違うのか」

「決定往生が揺らいだということではないのです。師のお
上人は、つねに新しい気分で、とらわれないお心で念
仏に励もうとなされているだけなのです。そういう言い
かたをされただけです」

「……」

「師のお上人にこんなお言葉がございます。人の命は食
事るとき、むせて死することもあるなり。南無阿弥陀仏
とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」

「南無阿弥陀と唱えながら噛んで、南無阿弥陀仏でのみ
こむのか」

「そうです。この飲食が今生の最後となるかもしれぬ、
とおっしゃるのです。だから一声の念仏もだいじに、い
つも新鮮な気分で、また阿弥陀仏のお慈悲を実感しつつ
唱えようと強調されているのです」

「それで善信房、おぬしのその新鮮な、生きた念仏の証
かしを見せてもらおうではないか」

明遍は詰め寄った。

「そういう意味での証かしですか」

親鸞は突然立ち停まると、明遍の前に深々と頭を下げ
た。いったい何に叩頭しているのだろうか。

「それが証かしか」

「明遍どの、よくご覧下さい」

「何を……」

「私の頭をです」

蓬髪の頭が、何だというのか。

全く手入れをしていない丸い頭には毛髪が伸び放題だった。むさくるしいばかりである。

「この頭がどうかしたのかな」

「私は比叡山の常行三昧堂で二十年間、堂僧をつとめました。そのあと東山吉水の禅室で師のお上人に仕えました。この間、ずっと頭を丸めて過ごしました」

「僧なら、ひじりなら当然であろう」

「しかし、七箇条の御制誡を師のお上人から得たとき、頭髪を剃るのをやめました」

「なぜかな」

「専修教団もこれで終りだ、と思いこんだからです。俗に還る決心をしたのです。髪を伸び放題にしました」

「現在もそのままか」

「明遍僧都、よく私の髪を見て下さい」

「相変らず伸び放題……」

「違います。お手を出して掻き分けて下さい。半ば以上が脱け落ちているのです」

言われるままに明遍は、親鸞の頭頂に手をおき、毛髪を掻き分けてみた。なるほど、毛髪の前がおおいかくしてはいたが、根元から握り直してみると、その分量は半

分以下に減ってしまふ。明らかに脱毛している。

「どうして脱けたのかな」

「どうして、とお訊きになるのですか、私は獄に囚われました。拷問を受けました。懊悩しました。悲しみながら念仏だけを唱えました。それをくり返しているうちに、一本づつ脱け落ちていったのです」

「苦しみで脱毛させたというのか」

「現在でも毎日、一本二本と落ちてゆきます。おわかりですか、明遍僧都。私は僧ではない。俗でもない。禿なのです」

「禿……」

「愚かなる禿」

愚禿禿——

「……」

明遍は毛穴だけが廃墟のように点在する親鸞の頭皮に見入った。凄まじい廃墟ではないか。

「明遍僧都。これが証かしです。現在の私は助け給えと弥陀の愛を念ずることに、おのれの毛髪を献供しているのです。誇示しているものではありません。いまの私が精一杯に生きる証かしは、これしかないということを知っ

て頂きたいだけなのです」

だからこそ自分を傍観者、墮地獄の変節者、と親鸞は見下すのであろうか。

明遍は「禿」に庄伏されて、一語をも洩らし得なくなつたわが身を情けなく思つた。

親鸞はこのころの体験を、後年「教行信証」の後序で鋭利な文章で書き綴る。

——太上天皇（後鳥羽院と号す、諱尊成）に今上（土御門院と号す、諱為仁）の聖曆、承元元年（建永二年が改元）丁卯の歳、仲春上旬之候に奏達す。主上・臣下、法に背き義に違し、忿（いかり）を成し、怨を結ぶ。茲に因りて、真宗興隆の太祖源空法師、并に門徒教輩、罪科を考えず、猥しく死罪に坐す。或は僧の儀を改め、姓名を賜うて遠流に処す。予は其の一なり。しかればすでに僧に非ず、俗に非ず。是の故に「禿」の字を以て姓と為す

また「歎異抄」では、

——後鳥羽院之御年、法然聖人他力本願念仏宗を興行す。時に興福寺僧侶之ヲ敵奏ス。御弟子中狼

藉子細アルヨシ。無実ノ風聞ニヨリテ罪科ニ処セラルル人数ノ夢、一、法然聖人并ニ御弟子七人流罪、又御弟子四人死罪行ハルルナリ（中略）親鸞僧儀ヲ改メテ俗名ヲ賜フ。仍テ僧ニ非ズ。俗ニ非ズ。然ル間、禿ノ字ヲ以テ姓ト為シテ奏聞ヲ終ラレオワンス。カノ御申シ状、今外記序ニ納ルト云々。流罪以後、愚禿親鸞ト書カシメ給フナリ

とも書く。

峠の頂上へ出た。もう黄昏が山肌を包みはじめていた。わずかな残照が遠く爪先の彼方に敦賀の海港をえがきだしていた。

「僧都、今宵はどこへお泊りか」

親鸞が訊いた。

「おぬしは？」

「わしは国府の屯所になるでしょう。のう……」

と関所役人に念を押した。

越前国府の屯所が敦賀にあるらしい。その獄に留置されるといのである。親鸞は流人の生活に戻らねばならない。

「また毛髪が一本、脱け落ちるかな」

「そうなるでしょう」

親鸞は屈託なく笑った。

その笑顔が、明遍に決断させた。

「わしはまた京へ引返そう」

「このまま帰りますか」

「一つの執着を断ち切れば、また新たな執着が湧いてくる。善信房、おぬしの申すとおりだ」

「そのお仏像は、そのまま持ち帰りますか」

「うむ。それがよさそうだ」

「きつと、それがよろしいでしょう」

親鸞はなだらかな下り道を、たしかな足取りでおりていった。明遍はいつまでも見送っている。

淀の川面で囚人船へ去ってゆく法然を見送ったときは、また別な感慨があった。妙になつかしまれる念仏ひじりではあった。

再びもと来た峠道を愛発の方へ引き返してゆく。これからは夜道になってしまうだろう。相変らず明遍の足もとはおぼつかなく、かつ重かった。さまざま矛盾撞着を抱えこみながら、この「ひかり仏」を朝夕眺めて暮さ

ねばならないからである。

——鎮西の本覚房、明遍に問い奉りて曰く。「心もし散漫せば、其時の称名善にあらず。心静かにして後、唱うべきと申し候は、いかが用意すべく候らん」答えて曰く「其は上機にてぞ候はん。明遍がごときの下機は、心をしずむる事は如何にもかない難ければ、念珠の緒を強くして、乱不乱を論ぜず、くりいてこそ候へ。心のしずまらん時と思わんには、堅固念仏申さぬものにてこそ候わんずれ」

（一言芳談）

明遍は、後年になってこうした問答文を残している。心を統一して静かな心境なぞ到底自分には望めない。せめて緒の丈夫な数珠を握りしめて、迷ったまま爪まぐり続けるだろう、という意である。

これが明遍なりの悟達、正覚だったかもしれない。そして彼もまたこの時期における有名な念仏ひじりの一人だったのであった。

（おわり）

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。左記をさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しく協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十九巻 六月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年 五月二十五日 印刷
昭和五十八年 六月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒101 振替東京八二一八七番

＜『浄土』誌連載中の大長篇歴史小説＞

待望の本格／＼仏教／＼歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに発売中！！

念佛ひじり三国志

―法然をめぐる人々―

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻（各巻定価一五〇〇円 千各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

―第一・第二・第三・第四巻発売中―

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一
振替（東京）四一五六五三四

第四十九巻

六月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和五十八年五月二十五日印刷 昭和五十八年六月一日発行